



Title	巻頭の言
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報
Issue Date	1929-12-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77664
Type	column
Note	出典：各務時報 40号 昭和 4年 12月 25日、各務時報 41号 昭和 5年 2月 25日、各務時報 42号 昭和 5年 4月 30日、各務時報 43号 昭和 5年 5月 30日。
File Information	A008_1936-52S4-S6_Part2.pdf



[Instructions for use](#)

第十四號

岐阜高等農林學校友會

昭和四年十二月二十五日發行

卷頭の言

庭の満天星の紅葉も盛りを過ぎて疲れ切つた生色のない葉ももう幾ひらか残つて居る丈である。静かに庭に立てば初冬の氣が手足に沁み入つて来る。試みに満天星の一枝を仔細に見入ると小枝の尖然毎にもうすつかり新芽の準備が出来上つて居る。その新芽の一つをもぎとつて見るとこの一冬の寒さに戦ひぬくに充分な生氣がそこにこもつて居た。

梅の木はもうとつくに葉は一枚もないけれどもつや／＼とした緑の新しい小枝にはもう蕾の形が宿つて何時にても花さく準備が出来上つて居る庭の隅で自然に生へ出て殆ど顧られない小さい楓を木にもふくらむばかりになつて居る幼芽が澤山に出来て居る。

庭はさびしくはない。葉は落ち花は一つもないけれども。

何と云ふつゝまじやかな自然ではないか。その不斷の替みは何と云ふ眞剣さではないか。

庭は只春が来るばかりである。

第十四號

岐阜高等農林學校友會

昭和五年四月三十日發行

卷頭の言

天涯に土と我とのみしか考へない。春の午後はのどかである。漸く温まつて來た土壌のよい感觸が身に沁みる。大地の吐息が五体にとけ込んで來るとでも云ふのか。

だが安値なロマンテイシズムの夢は追ふまい霜を割つて芽ばえて出た麥はもう一尺ものびた。その深い緑の色は誰れのものだ。

ふと耳をすますと警鐘とジャズの音が響いて來るよ。

掘り返した土の香はよい。

(世亭)

第十四號

岐阜高等農林學校友會

昭和五年二月二十五日發行

卷頭の言

矜りとは自分が自身を満足する氣持ちである。自分の行爲に對して小賢しい人間達ではなく神が下した嘉賞である。他の人々に誇示するよるこびでは勿論ない。神の前に價値あるものもの自らなるよろこびである。千尋の海底に獨り光る眞珠の玉の永遠のよろこびである。

空の星は皆とり／＼の光りに見えるけれども、どの星も一つ一つ矜りを持つて居る。矜りを失つた星は落ちるのだ。

友よ

靜かに強く足取つて行け。

又一つ星が飛ぶ。

(世亭)

第十四號

岐阜高等農林學校友會

昭和五年五月三十日發行

卷頭の言

刈りとられた菜種の束が無雜作に一山に積みあげられてある中に、可愛さうに二三輪の黄色い花がまだ實にならぬ中に刈りとられて居た。

「馬鹿／＼しい。何時まで春だと思つてるのだ。」

刈りつた人はさう思つたのだらう。若しかしたら此僅か二三輪の不幸なる落伍者の運命は彼は一顧だに拂はなかつたのかも知れぬ。

「一匹の迷へる羊」よ

私がお前の爲に泣いてやる。だが泣いてやるより外に仕方がない。

一匹亭